

**<エッセイ：小特集「パンデミックに思うこと」>
新型コロナウイルスの日々：日本とイギリスの間**

| | |
|-----|---|
| 著者 | ブリーン ジョン |
| 雑誌名 | 日文研 |
| 巻 | 65 |
| ページ | 18-21 |
| 発行年 | 2020-09-30 |
| URL | http://doi.org/10.15055/00007544 |

小特集「パンデミックに思うこと」

新型コロナウイルスの日々…日本とイギリスの間

ジョン・ブリン

筆者の国イギリスは、人口が六六六万人前後の島国である。筆者が今滞在している日本の人口はその倍近くの一億二六五〇万人となっている。そして、人口の密度からいうと、日本の三三五人／平方キロメートルに対し、イギリスは二五九人／平方キロメートルという数字を出している。二〇二〇年七月二日現在で新型コロナウイルス感染拡大防止対策をその結果からみると、イギリスは大いに失敗しているが、日本は成功している。そういう結論を出さざるを得ないだろう。というのも、日本は感染者数が一万八〇〇〇人しかいなくて、死者の数を一〇〇〇人以下にとどめている。それに対しイギリスは、感染者が三〇万人を遥かに上回り、死者はなんと四万三〇〇〇人にも上っている。日英の単純な比較だが、日本がどれだけうまくウイルスを抑制できたのかを示す一つの尺度となるだろう。

日本とイギリスの比較をもう少し突っ込んでみよう。世界のウイルス感染者ランキングというのがある。それを見ると、イギリスは極めて恥ずかしい五位に入っている。つまり世界で感染者が五番目に多い国は、イギリスだ。ついこの間まで二位だったのが、ブラジル、ロシア、インドに追い抜かれてしまった。同じランキングにおける日本の位置づけは、自慢しても

よさそうな五二位である。致死率、つまり感染した人々のうち死者が何人出たのかの統計も、最近特に注目を浴びている。イギリスは世界で三番目に高い致死率を記録しているが、日本は世界の一一五位となっている。数字ばかりで恐縮だが、人口一〇〇万人単位でこの状況を見直してみると、一層はつきりしてくる。イギリスは一〇〇万人あたり四五〇〇人もの人々が感染し、うち六二八人もの死者を出す割合だが、日本は、一〇〇万人のうち感染者が一四五人に過ぎず、そして死者は九人しかない。どの角度から見ても統計は、桁違いの相違を示している。

日本は確かによくやっている。イギリスよりよくやっている。イギリスは失格なので、日本に見習うべきところは多々ある、はずだ。ただ、日本がとった防止対策のどこが特に評価に値するのか、またイギリスの対策のどこが特に悪かったのか、そもそもイギリスは日本の何に見習うべきかとなれば、そう簡単には答えられない。ジョンソン政権のレスポンスはヨーロッパの国々に比べて確かに遅かった。でも、安倍政権の出方も韓国などアジアの先進諸国と比べて決して早い方ではなかった。ジョンソン政権も安倍政権も、国民に対し発信してきた情報、指示などは必ずしも明確で理解しやすいものばかりではなかった。

世界保健機関（WHO）が、ウイルスの撲滅、第二波の防衛に欠かせないと執拗に言っているのは、PCR検査である。検査に関する統計が面白い。ジョンソン政権ではこれまで九〇〇万人以上の検査を行ってきた。五月に入ってから一日二〇万人以上の検査を現に実施している。この検査の実施数を世界的にみると、イギリスは四位に入る。日本で実施してきた検査数のトータルは四〇万人前後にとどまっている。比較のためにいうが、例えば人口一〇〇〇万人しかないアゼルバイジャン共和国より少ない検査数である。

中央政府から国民に目を転じてみると、どうだろうか？イギリスでも日本でも多少の混乱が生

じていたことは事実である。筆者の長男はロンドンの大きな病院で医療従事者（医者）を勤めているが、長男に言わせると、イギリス人はロックダウン、すなわち外出禁止を誠実に守り、またソーシャルディスタンス（例えば、スーパーマーケットなどで前の人と間隔をあける距離）も厳重に実施してきたという。日本の事情は、どうだろう。筆者の素人目にすぎないし、科学的根拠はないが、緊急事態宣言下の日本では、不要不急の外出を控えない人々がかなりいたようだ。京都では、まちの真ん中は確かに人気が少なかったが、賀茂川の河川敷などでスケボー、サッカー、野球、ラクロスなどのスポーツをやっている人もいれば、ピクニックをしたりする若者などもたくさんいた。お店などではソーシャルディスタンスをあまり守っていなかった（今でもあまり守っていない）。どうも京都を見る限り、日本人はイギリス人ほど危機感を感じていなかったのではないか。強いて言えばイギリス人のほうが、配慮があつて「従順」であつたのかもしれない。

日本の感染者数も死者数も世界的にみると低いが、その「なぜ」については専門家の間で意見が分かれている。日本人はマスクをよくするとか、キスやハグはあまりしないと、日本で流行っているウイルスは、欧米のそれほど強毒なものではないなどとの指摘もある。一方で、日本人は抵抗力を持つ遺伝子を獲得している、つまり人種による差異の可能性をほのめかす説もある。全く別の意味で、人種に重きをおく説は、麻生太郎財務大臣が提供している「民度」説である。財務大臣は、六月四日の参議院財政金融委員会での日本の致死率が低いことに触れ、こう述べた。

「お前らだけ葉持ってんのか」って、電話かかってきたときによく言われたもんでしたけ

ど、私どもとしては、そういった人たちの質問には、「おたくとうちの国とは、国民の民度のレベルが違うんだ」と言うと、みんな絶句して黙るんです。そうすると後の質問が来なくなるので、それが一番簡単な答えだと思って。

「民度のレベルが違う」とは、日本人が他のあらゆる国民よりも優れている、と言いたいのだろう。今求められているのは、解決に繋がらない感情的な文化論・人種論ではなく、科学的な根拠に基づいた研究や分析ではないかと思う。ともかく同じ島国で似たような対策をとってきたイギリスと日本の致死率がなぜあれだけ違うのかは謎のままである。

(国際日本文化研究センター教授)

- 1 <https://www3.nhk.or.jp/news/special/coronavirus/data-all/>
- 2 <https://www.worldometers.info/coronavirus/country/uk/>
- 3 https://www.worldometers.info/coronavirus/?utm_campaign=homeAdvegas1?%22%20%5C1%20%22countries
- 4 https://www.worldometers.info/coronavirus/?utm_campaign=homeAdvegas1?%22%20%5C1%20%22countries